

九月西天の黃道光について

黃道光課 荒 木 健 兒

西天の黃道光は、通例 2,3 月が最も明るく 5,6 月になると淡くなるが、私は 7 月 24 日非常に淡くなつたところを やつと Sketch したのが最後であつた。その時分から後は黃道が一層南に低くなるから、日本内地からは とても 觀測は困難だらうとされてゐた。しかし、何とかして見やうといふ野心を抱いてゐた私は常に日没後の西天に注意してゐたが、8 月も無收穫に送つてしまつた。

かくて 9 月に入ると、8 日には大阪の津田雅之氏から「黃道光は去る大正 10 年秋夕空に 1 度觀望した…」といふ御手紙をいただくし、13 日には Sketch こそ取れなかつたとはいへ西天に幅廣い薄光を認めるし、下旬の東天の黃道光が非常に明るく而も大變化が見られるし、それに秋の大空はうすみどり色にすみわたるといふわけ。ここに四拍子揃つて とうとう 21 日の西天に かなり はつきりと黃道光を認め Sketch を得た。ゆつくりと觀測したのであるがすぐ東の銀河が進撃して來るので薄明が終るか終らぬかの時刻に觀測せねばならなかつた。殆んど無謀に近い私の努力もこんなにして報いられたのは限りなく嬉しい。しかし、この結果を得たのも一には津田氏に負ふところで、誌上をかりて同氏に深謝する次第である。

21 日、22 日、24 日と三宵の觀測によれば（23 日はただ痕跡的存在をのみとめたにすぎなかつた）、黃道光は淡く、外形は頂點の部分がまろく、頂點の位置は黃道より北に 8° 乃至 12° の偏りであり、色は黃白色であつた。22 日には明らかに消長さへ觀測された。

9 月の西天に黃道光を見るといふことは、これまで全く行はれなかつたことで、かなり珍しい現象である。

机上に一管の筆により天空遙に一遊星の存在を主張するのも天文學のよろこびであるが、何百年かの研究の後完成された大學者の堂々たる議論が唯 1 回の觀測により無残にくつがへされるのも天文學のよろこびであるにちがひない。觀測の重大價値をよく味ひたい。（1930 9 26）

花 山 だ よ り

花山は今が一年中の最好季節です。研究のためにも、観測のためにも、暑からず寒からず。それに、例年に似ず、空は晴れ勝ちで、毎夜の観測は頗る涉ります。世間は米の豊作と經濟界の不況で、悲喜交々至る有様ですが、花山でも、雨が少ないため、用水が不足がちで、揭示場には絶えず「水を節約せられたし」といふ注意が掲げられてゐます。構内の松茸も、今年は雨が無いため、駄目です。しかし去る十七日、創立記念日の茸狩りには、虫に食はれたのを二つ三つ見つけました。

渡邊氏が都合で離山しましたが、其の代り、柴田氏が今秋から山に踏み留まり、観測と計算とを勵んで居られます。中村氏が柴田氏のために磨いた25センチ F3.8 の反射鏡も、赤道儀装置と共に、十月の記念日までには出来上りました。之れは恐ろしい器械です。まづ大體、46センチと同程度の偉力を發揮するだろうと豫期されてゐます。山本臺長は「花山には器械が多過ぎる」と常々言つて居られるのに、又々かうして新しい器械が殖えました。只この上は、人の増すことのみが願はく思はれます。

人と言へば、稻葉氏も今は曹長です。近い内に少尉殿となつて、めでたく退營される筈です。ちょうどエロス観測の間に合うやう歸學されませう。

十月十七日の創立記念日は愉快な一日でした。午前中に皆が揃つて、テニスやら、茸狩り。午餐會には約2時間其の間にも壯快なレコード・コンサート。3時から場面がからり一變して、生まじめに談話會。總計十六人が約五分づつ、過去一年間の業績を語り合ひました。之れは豫想以上の成功と興味でした。五時から餘興主任村上氏の盡力により 16ミリ映畫會となり、三四十分にわたつて、幾つかのナンセンス・フィルムが寫し出されました。中にも、多くの參觀人に埋れた花山天文臺のフィルムは自己の顔を眺めてゐるやうに面白いものでした。

名月の夜、本山氏一行の來訪は別頁の通り。